

【特別寄稿】

## 詩集『ことば』の誕生

放送大学名誉教授 柏倉康夫

### 1. 書簡集

*René Bertelé Jacques Prévert, Editer Prévert* [ルネ・ベルトレとジャック・プレヴェール、プレヴェールを出版する] ([ ] 内筆者訳) と題した本が、2017年5月、フランスのガリマール書房から刊行された。ジャック・プレヴェールはフランスの詩人、ルネ・ベルトレはプレヴェールの最初の詩集 *Paroles* (以下、『ことば』) を出版した人物である。本文が518頁もある本は、二人の間で交わされた手紙をはじめ、彼らを取り巻く人たちの間でやりとりされた手紙を網羅していて、これによってプレヴェールの有名な詩集の出版をめぐる詳細が明らかとなった。

ルネ・ベルトレは、1908年1月、南フランスのトゥールーズに生まれた。ごく若くして、文学とくに詩に惹かれ、大学卒業後は地元で出ている雑誌「自由ノート」の編集者となり、1928年から33年までは同誌の編集長をつとめた。その後パリに移って高等中学校の教師となるとともに、多くの雑誌に詩や散文を発表した。

1939年9月3日、第二次大戦が始まると兵士として動員されたが、1940年6月にドイツ軍がパリに入城して休戦協定が結ばれると間もなく除隊となった。フランスはドイツ軍占領下の北部地区と、ヴィシー政権のもとに置かれた自由地区に二分され、ベルトレは自由地区の南仏マルセイユに移って、雑誌「新生フランス」の編集に協力することになった。

ベルトレは編集者として多くの文学者と交流し、とくにアンドレ・ブルトンやポール・エリュアールなどシュルレアリストのグループと親しくなったが、ジャック・プレヴェールはすでにグループを離れていて、二人が出会う機会はなかった。

彼らが初めて顔を合せたのは、戦時下の1942年、南仏の保養地アンティープでのことである。このころプレヴェールもパリを逃れて、近くのサン・ポール・ド・ヴァンスに住んでおり、二人はアンティープやニースのカフェやレストランで出会ったが、言葉を交わす程度で特別の接触ではなかった。

ルネ・ベルトレにとってプレヴェールは「映画の人」であった。事実、プレヴェールは1936年に制作された『ジェニイの家 (Jenny)』をはじめとして、38年の『霧の波止場 (Quai des brumes)』、39年『陽は昇る (Le Jour se lève)』、42年公開の『悪魔が夜来る (Les Visiteurs du Soir)』の脚本と台詞を書いていた。作品はどれも好評で映画界に確固とした地位を築い

ていた。そして、ルネ・ベルトレが出会った 1942 年、プレヴェールがシナリオを書いた映画『天井桟敷の人々 (Les Enfants du Paradis)』が、マルセル・カルネ監督のもとで撮影中だった。

ルネ・ベルトレは、*Mon aventure avec Jacques Prévert* [ジャック・プレヴェールとの冒険] ([ ] 内筆者訳) のなかで次のように書いている。<sup>1)</sup>

解放がやってきた。新生パリで、1944 年、私は小さな出版社を創設した。Le Point du Jour (日の出書房) ——のちに NRF=Le Point du Jour (新フランス評論=日の出書房) ——である。

そのころ、一人の友人 (映画人) が、ある日、私にこう言った。“いつかプレヴェールと夕食を共にするけれど、君も興味があると思うが?” 私たちは夕飯を一緒にした。プレヴェールは確かに輝いており、好奇心旺盛で、面白かったが、正直に言えば、「親密に」なったわけではなかった。・・・それでもその後は電話をかけあい、あるいは直接会って・・・本を一冊出すことが決まった。それには一年間の激しく、困難な交渉があり、それはときに苛立たしいことさえあった。<sup>2)</sup>

今度の書簡集では、ベルトレはプレヴェールに数多くの手紙を送って、事態の推移を伝えているが、プレヴェールの方はほとんどの場合、電話や電報、あるいは得意のコラージュに一言、二言添えた短い手紙で済ませていることが分かる。

## 2. 『ことば』の出版

若い出版人ルネ・ベルトレが設立の準備をしていた日の出書房が、1946 年 2 月 15 日を期して、ジャック・プレヴェールの詩集を発売するという広告が出たのは前年 45 年暮れのことである。ただし写真家ブラッサイの回想によれば、この計画はこの年 8 月には、友人たちの間ですでに話題となっていたという。ブラッサイは以下のように述べている。

1945 年 8 月 2 日 木曜日

世界大戦が終った。新聞はポツダム会議の終了を告げている。

「ドゥ・マゴ」[パリの左岸にある有名なカフェ] ([ ] 内筆者) で、足の先から頭のとっぺんまで新調して、めかしこんだジャック・プレヴェール。グレーの三つ揃え、グレーの帽子、赤いネクタイ、胸ポケットに赤いハンカチ、そして青緑の二つの眼がバラ色の珊瑚が透けて見える水底を泳ぐ熱帯魚のようだ。(中略) ジャックは映画の世界にうんざりしている。・・・

プレヴェール——たった一日パリにいただけで、殺されてしまうよ……。討論だ、契約だ、やれ会合だとまったく話しにならない! 映画の周辺にあるものといったら、うんざりさせ、がっかりさせられるものばかりだ。(中略)

献身的な友人ルネ・ベルトレが、あちこちに散らばっていたプレヴェールの詩を

かき集めた。まもなく一冊になって出版されるだろう。

ジャック・プレヴェール——ところで『ことば』の表紙は、君の引掻き絵の写真でとてもきれいになるよ……。ああ、これを見てご覧よ。最近送られてきたんだがね……。ぼくの詩を集めてつくった本さ……。ランスの高等中学生が色々な雑誌から僕の詩をかき集めて、このガリ版の本をつくったのだ。一部しかないんだが、それをぼくに呉れたのさ……。未知の子どもたちや先生のこういう振舞以上にうれしい贈り物はないよ。<sup>3)</sup>

ここで触れられているガリ版刷りの詩集とは次のようなものである。プレヴェールは1945年の7月26日、一個の小包を受け取った。ランスの郵便局の消印がある紙包みの宛先はプレヴェールで、カフェ「フロール」[同じく有名なカフェ] ([ ] 内筆者)の気付になっていた。プレヴェールが紐でしばった紙包みを開けてみると、謄写版で印刷し、番号を打った22枚の紙片が厚紙の表紙にはさまれて入っていた。表紙にはラベルが貼ってあり、丸まった美しい書体で、「Jacques Prévert Poèmes (ジャック・プレヴェール 詩集)」と書かれていた。これには次のような手紙が添えられていた。

昨年、私が「道徳」の時間に行った読書のあとで、私の学生たち〔ランスの高等中学校の哲学級〕([ ] 内筆者)がこの出版を思いつきました。彼らは幸運に支えられて、これを実現しました。まずテキストについていえば、私の書齋にあるもので満足しなければなりませんでした。私としては、「銃床を空に」が欠けているのが嘆かわしい限りです。野外学校が私たちに速記術を教えてくれなかったのが残念でなりません。次に印刷ですが、上々というわけにはいきません。奥付にある通り急いで印刷したものですから……。この初版は一般的な豪華出版というわけではなく、あなたのことを好きな若者たちの愛情の証しにすぎません。<sup>4)</sup>

手紙にはエマニュエル・ペイエと署名があった。ペイエはランスの高等中学校の哲学教師で、以前からプレヴェールの詩を愛読していた。このペイエ先生の感化で、プレヴェールの詩に感動したランス高等中学校の学生には、著名な医者の子のジャン・ドゥロッシュ、将来「ユニオン」紙の記者となるピエール・ローム、シャルル・マルク、女学生のブリジット・シモンなどがいた。彼らはペイエが所蔵していた雑誌からプレヴェールの詩8篇を探し出し、それをタイプライターで謄写版に打って200部印刷したのである。奥付によれば、印刷されたのは1944年7月10日。このとき連合軍はノルマンディーに上陸したあと、パリをめざして進軍中で、彼らが住むランスはまだドイツ占領下にあった。ランスの街が解放されるのは50日後のことである。

プレヴェールの詩は、ドイツ占領軍やヴィシー政府ににらまれていたから、それを印刷出版するのは大きな危険を伴った。収録されている8篇は、「フランス・パリにおける頭の晩餐会を描写する試み」(「コメルス」1931年夏)、「出来事」(「GLM ノート」、1937年11月)、「朝寝坊」(「スート」1936年7月)、「風景変換係」(「試みと闘い」1938年2月)、「こ

の愛」(ラジオ番組「ジャック・プレヴェールとの散歩」でピエール・ブラッスールが朗読。後に「フランス文学の横顔」1943年4月)、「聖なる書」(「メリディアン」1943年6月中旬号)、「外出許可」(「学生の木霊」1943年9月18—25日号)、「果核の季節」(「スート」1936年2月)であった。

プレヴェールは映画の仕事に追われている間も、ベルトレが自分の旧作を探し出す仕事を見守ってきた。プレヴェールには、自作を書きつけた紙や発表された雑誌をきちんと保管する習慣がなかったから、探索には忍耐と探究心が必要だった。それでもベルトレは幾人かの協力者に恵まれていた。かつてプレヴェールが主宰した演劇集団「10月」の仲間でもとともは司書だったシュザンヌ・モンテルが助けてくれ、プレヴェールが25年も前から出入りしていた、オデオン通りの「書物の友」の女主人アドリアンヌ・モニエの個人蔵書には、プレヴェールの詩が載った雑誌が多数含まれていた。こうしてベルトレは70篇の詩を見つけ出すことに成功した。「頭の晩餐会」から「バルバラ」まで、「鯨釣り」、「銃床を空に」、「財産目録」、「ピカソの散歩」など、プレヴェールの才能の幅広さと多彩さを示す作品が集まり、一冊の詩集を構成するには十分だった。

ベルトレはこれらの詩篇を基本的には制作年代順に配列した。1945年12月には印刷にかかり、正式な出版契約は1946年2月6日に交わされた。表紙にはブラッサイが撮りためた壁の写真を用いることにした。壁には釘の落書き(唯一「âne (ロバ)」という言葉が読める)が彫られており、そこに黒の手書き文字で、JACQUES PREVERT, PAROLES と、これも落書きのような文字でタイトルが書かれていた。



250頁の本文と表紙の印刷はE.オラルの工房が行った。マダガスカル紙に印刷した10部は5000フランで愛書家に販売され、リーヴ紙に印刷された324部のうち24部は、著者と出版者および友人への贈呈用で、AからZの文字が奥付に印刷され。残りの300部にはナンバーがふられて一部1500フランで販売された。

もう一種類の、戦後の紙不足を反映した粗悪な紙に印刷された5000部は350フランだった。契約では豪華版については、プレヴェールは売り上げの15パーセント、普及版では12パーセントを受け取るようになっていた。だが、詩集は予定の日には出版されなかった。

ベルトレからプレヴェールに宛てた、1946年3月2日付けの手紙——

親愛なるジャック・プレヴェール、

私は、あなたが本の出版に絶望しておられないことを望んでいます。本はすべて仕上がっており、出版が可能となる許可番号を待っているところです。

あなたにこの遅延の説明をしなくてはならないのは分かっていますが、もうこの事実には触れたくありません。あなたが嘆かれる理由が数々おありでしょうが、私もそれに劣らず、同じように残念に思っています。『ことば』が出版されるはずの1

月初め、友人と私はフランスの出版社をつくる自由を有効に使うことで一致しました。私たちは急いで「モナコ」ではない出版社を立ち上げる、・・・それが、あなたが「日の出書房」という名称でご存知の私たちの出版社です。ただ、フランスの出版社に要求される義務をすべて果たさなければなりません。つまり商業登記簿への登記、書籍組合の許可番号の取得などです。『ことば』を以前のモナコではない出版社から出すために遅延が生じたのです。本の印刷は終わっていますが、最後の頁に、前に触れた、正規の許可を載せるために装丁作業を中止しました。(中略)

この本が出たときに巻き起こる騒ぎをいまから予想しています。ジャック・プレヴェールを出版することに強い誇りを感じています。

ルネ・ベルトレ<sup>5)</sup>

### 3. 評判

詩集が書店の店頭に並んだのは、ベルトレの約束よりもさらに遅れて、1946年5月10日のことだった。書店に並ぶ前に、ベルトレから詩集を送られた評論家のガエタン・ピコンは、雑誌「合流」で、

プレヴェールの著作は、詩と一般の人びとが真に合体した価値ある唯一の例である。これまで幾度も試みられてきたが、今度こそこの二つは、決して離れ離れになることはない。(中略) 彼はごく自然に庶民の言葉を話す。その才気煥発さと、隠れた才能と、その複雑さとして、直接コミュニケーションをとる。そこには内に複雑さを秘めつつも、決して単純ではない庶民の言葉の力がある。・・・庶民は独自の神話もっていて、それは彼らの日常の存在のなかでしか見出すことができないものだ。プレヴェールは例外的に、決して外側ではなく、その内側にいる。」彼は、「具体的な現実のすぐ近くで」書いており、「カメラのようにそれを記録する」。彼の詩は、「体制に従わないアナキスト、懐疑的な一人の人物を浮き彫りにする。それというのも彼をだまそうとする企てが行われるときは、いつも疑ってかかるからである。そこから彼の、偉大さや英雄的行為を前にしたときの警戒心、“歩き出さない”姿勢、・・・彼の平和主義、反軍国主義、宗教への遺恨が出てくるのだ。<sup>6)</sup>

と書いた。このピコンの評語は、『ことば』に関して、これ以後に書かれる多くの批評の方向を決定づけるものとなった。

『ことば』の出現は、人びとにかつてない知的衝撃をあたえる事件だった。とくにサン・ジェルマン・デ・プレに集まる若者たちにあたえた衝撃は大きかった。彼らはドイツ占領下の4年間、自由に餓えていたが、プレヴェールはなにごとにも束縛されないアナキズムによって、若者たちの渴望を癒したのである。

詩集から立ち昇る自由の匂いに加えて、プレヴェールの詩はどれも学術的でなく、「街のことば」で書かれているのが大きな魅力だった。戦後文学の動向を見守っている人たちは、

一冊にまとめられたプレヴェールの詩の新鮮さにあらためて目を見張った。

印刷を終えた豪華版がまず予約した人たちに届けられ、ついで普及版が書店に並べられた。評判は口から口へ広がり、「書物の友」のアドリエンヌ・モニエは普及版を 500 部注文した。有名な書店のピエール・ベアルンやジョゼ・コルティも店頭に『ことば』を置いた。一冊の詩集が文学愛好家の枠をこえるブームの様相を呈していった。

実際アドリエンヌ・モニエの店では、最初の数週間で 500 部すべてを売り尽す人気だった。モニエの店で働いていたモーリス・サイエ〔彼はジュスタン・サジェの筆名で「コンバ」紙に文芸批評を書いていた〕（□ 内筆者）は、本を買っていく人の名前をノートに記入していた。5月10日の金曜日、ミシェル・クールノが最初の客だった。そのあとジャン・ベルナル博士が3冊買った。翌日には初日の倍の20人の客がやってきた。そのなかにはモーリス・アンリーや音楽家ルネ・レイボヴィッツの姿もあった。

映画会社のパテは、5月14日、『夜の門』のバルベス・ロシュシュアール駅をトローネがスタジオに再現した巨大なセットでカクテル・パーティを開いた。撮影中の映画の宣伝のためだったが、集まった招待客のうち、ジャック・ボワファールやフェリックス・ラビスは、帰りがけに『ことば』を買いに書店に立ち寄った。翌15日、書店「シェイクスピア・アンド・カンパニー」を開いていたシルビア・ビーチは通りを横切ってモニエの店に行き、話題の詩集を自分用に買った。その後彼女は通りを幾度も往復して結局14冊を買うことになった。家族がみな欲しがったからである。

その後もモニエの店の扉を押して、詩集を買いに来る人たちはひきもきらなかった。若い教授で『シュルレアリスムの歴史』の著者モーリス・ナドーは、「コンバ」に持っている批評欄でさっそくこの詩集をとりあげた。作家ジュリアン・グラックもモニエの店で詩集を求めた一人で、彼はアメリカにいるアンドレ・ブルトンにこのことを知らせた。

ミシェル・レリスやルネ・ファレもやってきた。ファレは「国際評論」の6月—7月号に、「ジャック・プレヴェール、または具象詩の出現」と題した10頁ほどの記事を書いた。ガエタン・ピコンの「文学的事件」という形容を意識したもので、彼は記事のなかで、これは「*événement*（事件）」ではなく、「*avènement*（出現）」だとした。

美術・演劇レジスタンス委員会が出すドゴール寄りの「オペラ」誌は6月5日号で、「毎日、街の壁には、ジャック・プレヴェールの『ことば』という文字が彫られている」と伝え、「永久変革の精神を翻訳したこの闘いの詩は、すべての世代の夢を武装するものだ」と書いた。そして「フランス・射手」誌は6月28日号で、「永遠のアンティゴヌのように、プレヴェールは経済の秩序に組み入れられること、妥協への決定的一步を超えること、駆け引きと寛容とを拒否している」と評した。

共産党系の反応としては、クロード・ロワがローザンヌの新聞「奉仕」の7月6日号で、「革命的で、反教権、反軍国主義、すべてに反対の」プレヴェールは、言語の驚くべき研磨師であり、「出来合いの意見をかきまわし、正しいとされ、心地よい思想の結託を解体する。・・・通常の公式は、彼の機敏な手によって、完全に一新されるか、決定的に殺される。」と好意的な見方を示したが、一方で「ス・ソワール」紙の7月7日—8日号では、アンリー＝ジャック・デュピュイが、「プレヴェールは高校生のアナキズムの類を脱するに至っていない、

その激しい無作法な言葉は決定的な効果をあげているとは到底いえない」と批判した。<sup>7)</sup>

プレヴェールがいまやパリ中の話題をさらっていることは間違いなかった。「本の友」のサイエは、7月21日にアンドレ・ジッドが現われて、『ことば』を買っていったことを記録している。ジッドは発売以来8週間でアドリエヌ・モニエの店の300番目の客であった。

間もなくして、ベルトレは出資者に、「この著作の新しい版を出版することに決めました。最初の版よりもっと入手しやすいもので、6~7,000部を刷ることを考えています」と伝えた。その後、『ことば』はプレヴェールの作品の出版を強く望んだガリマール書房から出ることになった。ルネ・ベルテの創設した「日の出書房」の名称は、ガリマール書房のシリーズの一つとして残ることになった。『ことば』はその後も版を重ね、フランスの文学史上もっとも読まれた詩集となった。

## 註

- 1) 特に断りがない限り、引用部分の訳はすべて引用者による。
- 2) René Bertelé : "Mon aventure avec Jacques Prévert" (René Bertelé : Jacques Prévert, Editer Prévert. pp.39-40, Gallimard)
- 3) Brassai : Conversations avec Picasso. pp.279-280(Gallimard)
- 4) Jacques Prévert : OEuvres complètes I, pp.987-988 (Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard)
- 5) René Bertelé Jacques Prévert, Editer Prévert . pp.47-50
- 6) Jacques Prévert : ibid. pp.998-999
- 7) Jacques Prévert : ibid. pp.997-1003

